

タビタよ、起きなさい

ヤッファにタビタというすばらしい女性信者がいた。貧しい人、特にやもめたちのために愛の業に励んでいた女性で、みんなからドルカスさん、ドルカスさんと呼ばれ、慕われた女性であった。そのドルカスが病気になるまで死んだ。人々はその遺体を洗い、屋上の間に安置し、嘆き悲しんだ。

ところがヤッファの信者たちは、ペトロがリダの町にいと聞いて二人の者をリダに送って、ペトロに一刻も早くヤッファに来て下さいと頼んだ。そこでペトロは彼らと共にヤッファに急いだ。ドルカスの家にはすでに大勢の人が集まって悲しみ嘆いていた。

死はすべてを奪い取って行く。そして葬儀は人間の絶望の象徴である。ペトロは、ドルカスが生前自分たちのために作った着物の数々を彼に見せて泣き叫ぶやもめ女たちの姿に、ひどく感動し、みんなの者を外に出し、よみがえりの主の介入を求めてひたすら祈った。それから遺体の方に向かって「タビタよ、起きなさい」と叫んだ。すると、彼女の目が開き、ペトロを見て、起き上がった。ペトロは彼女に手を貸して立たせ、それから信徒たちややもめたちを呼び入れて、生き返った彼女を見せた。

このタビタのよみがえりの出来事は、マルコ福音書5章にある会堂司ヤイロの娘の奇跡物語と非常に似ている。イエスは死んで横たわる娘に「タタ、クム」(娘よ、起きなさい)と言われた。するとただちに少女は起き上がった(5:21? 43)。会堂司ヤイロの娘を生き返らせた同じ主が、今、このヤッファで絶望と死の中にあるドルカスを生き返らせることによって、ご自身の力を表されたのである。

使徒言行録には奇跡を表す語が3つある。デユナミス(力ある業)、テラス(不思議な業)及びセーメイオン(しるし)である。奇跡は単に人々をアツと言わせたり、人々を驚かせるためには起らなかった。それは、聖書ではいつでも「しるし」として起った。すなわち、イエスがキリストであることを示すしるしとして奇跡は行なわれた。力ある不思議な業に人々はキリストの圧倒的な力と栄光とを見、恐れとおののきをもって主に立ち返ったのである。今日の、ショー(見せ物)と化したテレビ伝道者のやる「奇跡」とはなんと異なることか！

病を癒されるということはすばらしいことである。障害が取り除かれるということはすばらしいことである。しかし、病が癒されなければ私たちの神は信じるに値しない神であるのか。障害が取り除かれなければ、私たちのキリストは、信じるに値しないキリストであるのか。そうではない！私たちの神は、癒しを通してご自身の栄光を現すと共に、時には、癒さないことを通してご自身の栄光、その恵みと力を現されることもあるということを知ることが大切なことである(第2コリント12:1? 10参照)

イエスキリストの恵みと力を日々体験し、イエスがキリストであることを真に知っている者にとっては、(あえて誤解を恐れずに言えば)奇跡が起るかどうかはどうでもいいことなのである。よみがえりの主がいつも私たちと共におられるというこの事実を事実として知っているところに、キリスト者の力と慰めと希望の源泉があるのである。